

第 5 章

結婚

結婚相手

イエメン人は早婚である。女性であれば十四・十五歳が適齢期である。もっと早く結婚する場合もある。考えてみれば日本でも百年くらい前まではそうだったらしいからそれほど驚くには当たらない。赤とんぼの歌では「ねえやは十五で嫁に」行ったのである。早婚であればあるほど、本人に結婚相手を見きわめる能力はない。そこで、相手を見つけるのは基本的に親の仕事となる。日本と違ってイエメンには「お見合い」などという制度はないので、現在でも本人どうしの話し合いの機会がないまま、親が決めた相手の顔を結婚式の当日まで知らないというような事態がしばしば起こる。同じ村のなかから相手を選ぶ場合は子供のころに顔を見る機会はあるだろうが、都市ではまったく顔を知らずに結婚するのも珍しくない。容姿で女性を判断する男にとっては「人生最大のばくち」と呼ぶに値するだろう。もちろん女にとってもそうだが。

とはいえ、普通イエメンでは結婚相手の選択の幅は相当に狭い。極端にいえば生まれた段階で結婚相手の候補者は数人に絞られているのである。イエメンで最も望ましいと考えられている夫婦の組み合わせは「イトコ」どうしである。それも、ただのイトコではなく「父方のイトコ」どうしの結婚が理想とされている。アラビア語では「父方の叔父さん」を「アナム」と呼び、「娘」を「ビント」と呼ぶので、男にとって結婚相手になり得る女の子は「ビント・アナム（父方のおじさんの娘）」と呼ばれる。田舎では、イトコどうしは同じ村に住んでいる場合が

多いから、小さいころからお互いに顔は見知っている。だから結婚のばくち性はそれほど大きくない。

「ビント・アンム」婚はアラブ社会に広くみられる習慣だが、人類学的にいうとアラブ以外ではあまり例のない婚姻ルールだそうである。地球上の多くの社会では結婚相手を親族・姻族以外から選ぶ「族外婚」が一般的であるという。確かに日本でもイトコどうしの結婚は望ましくないと考えられている。ところが、アラブ社会ではむしろ「族内婚」が奨励されているのである。特にイエメンではその傾向が強く、地方では「ビント・アンム」婚の比率がかなり高い。

男の結婚年齢は女性に比べるとかなりばらつきが大きい。名家の出であれば親の意向で十四五歳で結婚させられることもあるが、普通は十八〜二十歳くらいで結婚する。最近はお嫁ぎで金を貯めてからという者も多く、そうなると三十歳近くまで結婚していない男も多い。いずれにせよ男は、自分自身で、あるいは周りの人の考えで「そろそろ結婚するがよろう」と判断された時点で結婚できる年頃の「ビント・アンム」のなかから相手を選ぶのである。もちろん、本人が（特に男が）どうしてもいやだといった場合や、適当な年頃の「ビント・アンム」がいない場合には、別の候補者を探さねばならないが、その場合でも、できるだけ近親者が好まれる。結婚相手の条件として年齢の釣り合いというものにはあまり頓着しない。男が年上でありさえすれば、いくつ違おうと構わないのである。

女性は子供が産めるようになるといつても嫁ぐことが可能である（それどころか初潮前に嫁ぐことも珍しくはない）。いつまでも嫁がずにいて間違いが起きて「未婚の母」にでもなってしまうたら親族一同の恥であるから、親は悪い虫がつかないうちにさっさと嫁がせたい。だから娘がまだ若すぎる場合でも、双方の親が承諾すればとりあえず結婚だけはすませて、一人前の女になるまでは生みの親のもとで養育しつつつけてもらおうという例もあるようだ。あるいは「女」になるまでは、夫が親代りに養育するような形になることもある。女が世間を知らないうちに結婚すれば夫の教育をより多く吸収できるので、女性の早婚は望ましいとされている。「源氏物語」の光源氏と紫の上のような話であり、こういうのは男なら一度はあこがれる。

一方、女性にしてみれば、生まれた瞬間に自分より何年か前に生まれたイトコのなかの誰かとの結婚がほぼ運命づけられているのである。自分で相手を選ぼうなどと考えることはまずない。どだい、親兄弟以外の男と口をきいてはいけないのである、どうやって自分で選ぶことなどできようか。そして、多少氣に入らなくても「親の決めた相手と結婚するのが最も賢明である」という考え方はかなりゆきわたっているようだ。

だからといって男のほうにも選択の自由があるというわけではない。若い男が町なかで女性を「ナンパ」しようにもそもそも女性は歩いていない。ベールを被ったままでは、顔の美醜はもとより年齢好だってわからない。人妻に声でもかけようものなら旦那から撃ち殺されても文



ムハンマド（中央）と日本人のカート・パーティー。
写真右下にカートの噛みカス入れが見える。

句はいえないのだ。それに男は勝手なもので、顔を出して歩いているようなはすっぱな娘は、自分の嫁になどできないと思っている。顔を出している女性はほとんどがインテリだから、小学校もろくに出ていない男にとってはどのみち選択肢の外である。女性は従順、無知であるほどよい。ちなみに、イエメンでは学校は、通ったとしても小学校から男女別学なので同級生と結婚ということもない（大学はサナアとアデンに一つずつしかないのではやむをえず共学だが）。

多くの友人のムハンマドは田舎の出身だが大学までいったインテリである。彼は自分の結婚に際して、親の決めたジャミーラという娘（ピント・アムムではないが母方の近親者であった）のところに旧弊を破って結婚前に訪ねて行き、二人きりで話し合いをしたという。大胆なことをしたものである。ムハンマドは「本当に俺と結婚していいのか」と尋ねた。ジャミーラは「お

父さんの決めたことに従います」と答えた。ムハンマドは納得せず「これは自分の人生の問題なんだから、自分で判断しなければだめだ」と説教した。ジャミールはなおも「お父さんの決めたとおりにします」と答えたという。考えてみれば、そんなこと聞かれてもジャミールに選択肢などありえようか、ましてや本人を目の前にして「イヤ」なんて言えるわけもない。

とはいえ「正しくない因習は改めるべきだ」という若きインテリの正義感がそうさせたのだろうから、ムハンマドの心意気は評価しよう。ともかく二人はめでたく結婚し、かわいい二人の娘に恵まれた。二人とも親の決めた結婚がやっぱり正しかったと思っている。

四人妻

「イスラムでは男は四人まで妻を持てるそうだが、羨ましい」などと本気で思っている人もいると思うが、実際に四人も妻を持っている人はそれほど多くはない。特にイエメンでは、近ごろは高騰した婚資をためるのに時間がかかるので男の結婚年齢が上がる傾向にある。一人目の妻でさえやつのことで娶えることができるという状態である。四人の妻を持ちたければ婚資を四回払わなければならない。だから四人妻を持つなど、よほどの大商人か政治的な大立者にでもならないかぎり不可能である。

実際イエメン男性の一〇人中九人までは妻を一人しか持つておらず、「どうして二人目をもらわないの」と聞くと、負け惜しみかもしれないが「妻なんか一人で十分だ」という答えが返ってくる。せっかくイスラム教徒に生まれてもたいていの男はこの特権を享受できないのであ

る。それに町に風俗産業があるわけでもなし、どこかの国のように不倫などというものが流行る素地もないから、イエメンの男たちはいたって清廉潔白な生活をしているのである。むしろ日本の男のほうをイエメン男性は羨んでいるにちがいない。

ところで、なぜイスラムで複数の妻帯が認められているのかには、いろいろ説明の仕方があ
るが、よく言われるのは、イスラム勃興時に異教徒との戦争で多くの働き盛りの男たちが戦死
し、未亡人であふれてしまったので、その救済策として認められたという説である。だとすれ
ば、それほど未亡人が多くない現在では、複数の妻を持つ必要もないわけだ。そもそも男女の
出生比率はこの世界でもほぼ一対一に決まっているから、複数の妻を持つ男が増えたら、独
身の男も増える勘定になる。女が複数の夫を持つことは認められていない。公平を期すならイ
スラムの特権にかかわらず一夫一婦制が自然である。

加えて預言者ムハンマドは、複数妻を持つ場合の条件を一つつけている。それは「すべての
妻を公平に扱えるのであれば」という条件である。これは、厳密には実行が困難な条件である。
戦国時代の日本の殿様のように正室（第一夫人）がいて、第二夫人以下は側室・お妾さんとし
て位置づけるといふような扱いは許されない。一人目の妻に部屋があれば、同じ大きさの部屋
を二番目の妻にも、三番目、四番目の妻にもあてがわなければならない。そしてそのなかの化
粧台も、化粧品も、夜具も差をつけずに買い与え、指輪でも買ってやろうと思ったら、いっぺ

んに四つ買わなければならない。だからといって安物で済ませれば、だれからも感謝されない。どだい四人妻など甲斐性のない男には無理なのである。

公平にしなければならないのは金銭的なものだけではない。今日アーイシャと同衾したら、明日の夜はハディージャと床を共にせねばならず、明後日はかならずハスナアと枕を並べなければならぬ。その次の日に疲れたからといってザイナブのところでは寝ないとなると、これは「不公平」である。ザイナブが怒って、隣近所にいいふらし「複数妻を持つ資格のない男」という噂が立てば、面目丸つぶれになってしまう。体力がない男にもできない仕業なのである。

さらに女は普通は外に職業をもたず一日中家にいる。利害の対立しやすい四人の女が喧嘩を始めるのは火を見るよりも明らかである。そうなれば、仲裁は夫の役目であり、夫以外に仲裁のできるものもない。へたをすれば、家にいる間中仲裁をしている羽目になる。精神的にもタフな男でないとつとまらないのである。それでも、あなたは四人妻を持ちたいと思うだろうか？

え？四人妻には自信がなくても、二人くらいは持つてみたい？イエメン人もそう考えるようである。二人の妻を持つのは、自分に人の倍の甲斐性があることの証明になる。妻が多ければ一度に何人もの子供が作れる。子宝は多いほど良いのである。ただ、だからといって若い頃にいつべんに二人も嫁をもらうのは経済的に難しい。仮に親がかりで経済的には可能であったと

しても、同じ年格好の女二人だとしても競争意識が働いてもめごとが起こりやすい。だから若いうちは妻一人で我慢し、妻に操をたてて一生懸命に働き、功なり名遂げて少し生活に余裕が出てきたら、人生の成功の証としてもう一人若い娘を妻にする。これがイエメン男性の秘かな、かつ偽らざる願望であろう。実際に二人妻を持っている男はたいていこのパターンである。

「それじゃ糟糠の妻がかわいそうじゃないの」という批判はもつともである。しかしある程度年をとったら、自分の娘くらいに二番目が来てもやきもちを焼くこともないし、面倒な旦那の世話と、体力のいる家事を任せただけが楽ができていいわ、という考え方もあるらしい。それに子供も同居していれば自分だけが放り出されるわけではないし、邪険にされるわけでもない。まあ、夫の甲斐性とあきらめるのが貞女というものなのだろう。

イエメン女性なら、初めからイスラム教徒として結婚できない定めなのでまあ我慢するだろうが、最近ではイエメン人と結婚する外国人女性も増えている。その場合、彼女らの最大の心配は、二番目の妻がある日突然連れ込んだりしないか、ということである。彼女らにそれを受け入れる気はさらさらない。そこで結婚のときに「二人目の妻を娶らない」という契約をするのが流行っているらしい。

もつとも最近ではイエメン女性も、黙って我慢するつもりはない。ムハンマドの妻のジャミ

ーラは、ある時ぼくに「ムハンマドが日本に遊びにいつても、日本人の女性なんか紹介したらだめよ。そんなことしたら、あたし怒るわよ」と冗談めかして言った。それは、ぼくの知るかぎり、ジャミーラのした唯一の明確な意見表明であつた。イエメン女性の権利の主張は、もしかしたら嫉妬をエネルギー源にして始まるのかもしれない。

婚資

多くのイエメン女性にとって自分の希望で結婚相手を選べない以上、結婚は人生最大の運だめしである。一方、男にとっては、結婚するために必要な金を蓄えることが人生最初の試練となる。結婚がイエメン社会における最大のイベントである理由はこのあたりにある。

結婚に当たっては、まず、花嫁とその父親に支払う婚資（マハル）が必要である。そしてまた結婚披露宴は花婿の家の格式と名誉をかけた立派なものにしなければならず、これまた結構な金がかかる。婚資はすなわち結納金である。結納の習慣自体は珍しいものではない。日本でも、地方によつて相場は違うだろうが、結納金は男の月給の三カ月分だの、ダイヤの指輪一つだのということになっている。結婚式に金をかけるのもめずらしい習慣ではない。日本では披露宴にどれだけの人を呼び、演出にどれだけ凝るかにもよるが、普通に生活しながら二―三年その気で貯めれば、結婚資金は貯まり、つつましい海外ハネムーンくらいはできるだろう。それに近ごろでは女性も働くから、結婚式費用の折半も可能である。結婚資金を貯めるのはそれ

ほどの大事業ではない。

しかし現在のイエメンではことはそう簡単ではない。まず、第一に女性の社会進出はほとんど進んでいない。したがって結婚披露パーティーの費用は、基本的に花婿側が全面的に用意しなければならない。そして、最大の問題点は婚資の相場がべらぼうに高くなっている点にある。婚資にはいくつかの意味がある。イエメンでは、ビント・アム婚が多いので、どの馬の骨ともわからぬものに娘を嫁がせるといふ状況はあまりないが、嫁いだ娘が貧乏生活を送ることにならないように、相手の男の甲斐性を事前に審査しなければならない。婚資が貯められないような男に娘をやるわけにはいかない。事前テストの機能である。

もっとも近親者どうしの場合、婚資の全額を結婚前に払わなくてもいい。結婚前に三分の一だけ払って、もし離婚したら残りを払うという約束を取り交わしてとりあえず結婚する場合も多いようだ。これは、離婚がしばしばあるイエメンにおいては、女性の離婚後の生活資金、慰謝料としての機能をもつ。またこの規制によって財力がない男がみだりに女を離縁できないようにする抑止力としても働く。一種の社会的保険のような機能をもっているシステムである。婚資の額の決定システムは、ビント・アム婚の奨励機能ももっている。婚資の額は娘の器量によって、また父親の計算によって異なるが、基本的には身近のものほど安くてすむ。ビント・アム婚の場合、婚資を払う相手は自分の叔父である。相手はそれほどべらぼうな額を要



中部イエメンのマウル村。比較的なだらかな山岳地で、ワデー（涸れ谷）沿いの低地に依存した農村である。

求しない。婚資で花嫁の嫁入り道具をまかない、花嫁の家でのパーティー代がまかなえれば、それ以上は必要ではない。村の中はおおかた親戚どうしだから、同じ村の中での結婚の場合、婚資は最も安くすむ。

中部イエメンのマウルという農村にぼくはときどき泊まりがけで出かけて行つた。行くときとい友人のアブドの家に居候したのだが、当時アブドは二十代の後半で嫁探しを本格化しているところだった。一九八六年の話だが、アブドは村の中から相手を見つければ婚資は七〇〇〇リヤル（日本円で約七万円）ですむ、と言っていた。いちばん近い町であるラダア（車で三十分の距離にあり、大きなスーク、モスク、政府の役所などがある）からもらうと一万五〇〇〇リヤルから一万八〇〇〇リヤルが必要で、サナアからもらうともっと必要

だということであつた。当時民間に比べると安月給と言われた教師の月給が二五〇〇リヤルだつたから、七〇〇リヤル程度の婚資であればなんとか自分で稼いで用意できる。

ただし結婚式のパーティー費用はまた別である。パーティーは村の中だからといって、適当に安くあげるといふことは許されない。なぜなら結婚式は単調な村の生活のなかではほとんど唯一の娯楽であり、楽しみだからである。それは、各家が代わり番で行うエンターテイメントであつて、これをケチつたら、村中に「ケチ」の評判を立てられてしまう。そうになると、弟や妹が結婚相手を見つけるときに不利になる。そもそもそんな評判は家の恥だから、結婚披露パーティーには金をかけなければならない。

だから、婚資が七〇〇リヤルだとしても、結婚のためには新居の準備（親の家に同居するのだが、家具調度は新たに整える）、披露宴当日の食事、カート、衣装、ダンスのための楽士を雇う金などにかかる費用は総額で三万〜四万リヤルは必要となる。こうなると、なかなか若くして結婚するというわけにはいかない。ましてや他の村や町から嫁をとるとなると婚資の額が跳ね上がる。

よそ者に要求する婚資の額が高くなるのにはいくつかの理由がある。ピント・アンム婚の奨励には血縁集団（同じ村に住む者は、たいてい血のつながった近親者集団である）の結束を維持するという社会的な意味と同時に、土地の権利の分散を防ぐという経済的な意味もある。イスラ

ム法では女性にも相続権が認められているため、よその村から嫁をとると、村内の土地によそ者の権利が混入することになる。これは望ましくないもので、できるだけ内輪でビント・アンム婚をし、権利を拡散させないようにするのである。

また、女性は母体としての資産である。村落間抗争の激しいときには、どれだけの戦士を持っているかが、村の勢力を決めた。したがって人間を生み出す能力をもった者が他の村に嫁ぐのは、自分の村の戦闘能力の生産力が低下するばかりではなく、いつ敵になるかもしれない相手との村の戦闘力が増す結果になるから、二重に危険である。したがってこういう場合は、婚資という形で多額の代償金を取り、この埋め合わせをするのである。だから、よそ者へ嫁がせるときは、父親は多額の婚資を要求できる。

マウルの隣村にファラーザアという村があつて、そ



マウル村の若者。いずれもサウジアラビアへの出稼ぎ経験がある。

この肉屋の店番をしている娘はこのあたりでは珍しく顔を出して、かなりの美人である。タバコ屋の看板娘みたいなものだ。周囲の村の男たちが嫁にしようと言い寄っているが、娘の父親は娘が美人なのをいいことにマハルを二〇万リヤル要求してる、という話だった。美貌の娘を持つことは、父親にとつての財産である。

ところで、もし日本人がイエメン娘と結婚する場合、婚資はいかほどになるか。ぼくはマウル村で四〇万リヤルだと言われた。これは当時の価格でランドクルーザー一台分にはほぼ等しかった。どういう根拠でそういう計算になるのかは知らないが、別の機会に別の人に尋ねても、だいたい同じような額を答えてくれたから、でたらめな数字を言っているわけではなさそうである。彼らなりの根拠があるのだろう。

娘が日本に行つてしまえばもう二度と会えないかもしれないし、異国での生活は苦勞も多いからかわいそう、というような条件がインプットされているのであろう。ランドクルーザー一台分が安いか高いかは見解の分かれるところだが、イエメン娘は全般に彫りが深く、目がパッチリしていて、スタイルの良い美人が多い。

ただし、もしその気になったとしても、あなたがイスラム教徒に改宗するという条件があるのを忘れなく。

乙女

三十年くらい前まで日本の中心的な倫理観であつた武家社会的道德がそうであつたように、イエメン社会でも純潔性は結婚に際して重要な、というよりも不可欠な条件である。そもそも純潔性を守るために娘は初潮を迎えたときからベールで顔を覆うのである。悪い虫は細心の注意をもって排除される。イエメン人は欧米社会を墮落した社会として批判することがしばしばあるが、その最大のポイントは未婚女性に関する性道德が地に墜ちている、という点にある。

嫁にやる娘が処女でないことは、まず何よりも父親にとって一大事である。初婚の娘の婚資は彼女の純潔性を前提として要求されるのであり、父親は我が娘を悪い虫など寄せつけずに育てた、という誇りをもって婚資を受け取るのである。だから娘が処女でなかったら、花婿との契約の不履行、あるいは詐欺にあたる。契約不履行は男の恥である。ふしだらな娘をもつのは、一家の恥である。おまけに娘をよその男から守る義務をもっていた父親にとっては、自分の能力のなさを曝すことにもなるのだ。

そういうわけだから、父親はなるべく早く「家の恥のもと」をやっかい払いしてしまいたいと考える。一度結婚してしまえば、その女が身持ちよくするかどうかを監督するのは夫の責任になるからである。女性の結婚年齢が低いのはこうした理由による部分も大きい。

もし、結婚式の夜に花嫁が処女でないことが判明したら、父親にとって名誉を保つ唯一の方

法は自分の手で娘の命を断つことである、という。なにやら中世の日本の武家社会を見るような話だが、イエメンでは現に今でもそういう悲劇はしばしば起こっているようだ。ただし、この手の話の当事者はよそ者に家の恥を話したがらないのは当然だし、女性にからむ話であるだけに外国人の男性には実際に何が起こっているのなかなかわからない。イエメン人の男から話を聞くと、イエメン女性とつきあいのある外国人女性から話を聞くとという形でしか、情報を得ることができないのである。

北イエメンの南部、タイズ周辺のホジャリア地方で民話を収集しているフランス人女性から聞いた話。最近台所にプロパン（ブタン）ガスが普及するようになってきているが、爆発事故もよく起きる。そして、犠牲になるのはどういうわけか、結婚式を目前に控えた娘が多い。それは、たぶん結婚当日に自分が処女でない事実がばれてしまうのを恐れた娘たちの自殺ではないかとささやかれている、と。イエメンでは純潔性は、現在でも文字どおり娘の生死に関わる問題である。

あるとき友人のムハンマドに「もし、自分が結婚した女が処女でないとわかったらどうするのか」と尋ねたら、「もちろん、結婚は無効だ」ときっぱり。「ただし、結婚当日そんなことを表沙汰にすれば、相手の家の恥を公言することになってしまい、その女性も殺されてしまうかもしれない。だから、分別のある男なら、その日は何事もなかったように披露宴をすまし、し

ばらく結婚生活を続けたふりをしてから離縁してやるだろう」と言った。武士の情けと言うべきだろうか。

とはいえ、どこの国でも都市の若者は欧米の「自由な」性道徳に染まりやすい。やはり多くの友人で派手好きなフセインは、許嫁のザイナブと結婚前から濃密なデートをしていた。これは現在のイエメンではきわめてまれなことだが、彼らは「愛し合ってるんだ」からいいじゃないか、と婚前交渉まで肯定していた。しかし男女が町なかでデートすることなどできない国である。ましてや連れ込みホテルなどない。そこで彼らは大胆にも町外れに逢瀬のためのアパートを借りたのである。なんということであろう。ザイナブの親が知ったら、フセインは銃殺されても文句は言えないのである。

もつともこういう事態になるのは、結婚費用が高すぎてなかなか正式な結婚ができないというところにも問題はあるのだ。政府は婚資のインフレを防ごうと、婚資の上限を定めたが誰もそんな決まりを守ろうとはしていない。

それはさておき、あるときザイナブが妊娠してしまった。さすがのフセインも大慌てである。ことが露呈しないうちに何とかしなければならぬ。もし自分の父親に知れたら勘当である。西洋かぶれのフセインでも父親を畏れ敬う気持ちは忘れていない。

墮胎のための医療機関は表向き存在しないが、アルバイトで墮胎手術をしているエジプト人

の医者がいるのだという。もちろん墮胎の手術はかなりの金額を要するが、この際秘密さえ守ってもらえるなら、いくらでも金を出そう。「恥」は金にはかえられない。幸い自分で店をもっているフセインは親に内緒で金を工面でき、手術は無事成功した。それから半年後に彼らはめでたく結婚し、幸せそうにヨーロッパに新婚旅行に出かけて行った。

離婚

イスラムでは一般に、離婚が多い。男が妻を気に入らなければ、三度続けて「離婚だ」と言えばそれで離婚が成立することになっている。日本の江戸時代の「三行半」^{さんぎはん}と同じようなシステムである。女の側から離婚を主張できないが、実質的には亭主に愛想をつかして父親の家に戻ってしまい、事実上の離婚が成立する場合もしばしばある。いずれの場合でも、子供は自由に父親と母親の間を往き来できるようだ。

わりと頻繁にあることなので、離婚されたとしてもそれは女性にとってそんなに不名誉なことではない。それに結婚しても女性が夫の名字を名乗るわけではないし、戸籍制度もないから、離婚にともなって姓を変えたり戸籍に傷がつくということもない。とはいえ、女性の社会進出が進んでいないために、離婚した女性の生活はどうなるかが気になる場所である。離婚された女性は通常父親の家に戻る。父親がすでにいなければ、叔父（アムム）、あるいは兄弟の家に転がり込むであろう。他に保護する者のいない近親の女を保護し、生活を支えるのは男の義務である。だから、行くところがないという状況にはなりにくい。ただし父親としては、娘の

将来のために、できることなら別の男のもとへ再度嫁がせようとする。

では、出戻りの女性に再婚のチャンスはあるのだろうか。かなりある。まず第一に妻に先立たれた男が多い。衛生状態、栄養状態があまり良くない状況で多産をするので母体の消耗が激しく、「産後の肥立ち」が悪くて死亡してしまう場合がかなりある。そうした場合、夫は乳飲み子を抱えて立ち往生してしまう。再婚しようにも、すぐに婚資の用意などない。このとき手近に出戻りがいて、その女性と結婚すれば子供の養育や家事の問題が解決できる。出戻りの場合は婚資はかなり安くなる。だからある程度若ければ、出戻りにもチャンスはかなりある。また、自分の近親の女性が離婚して経済的に困っているような場合、二番目の妻として迎える例もしばしばある。これは一種の社会保障システムである。

離婚の理由にはいろいろあるだろうが、「子供ができないので」というのがよくある話らしい。日本の百年くらい前と現在のイエメンとが似ていると思うことがずいぶんある。「嫁して三年、子なきは去れ」である。この国は鎖国を解いて三十年。日本では安政の条約で開港したのが一八五六年だから、その三十年後なら一八八六年、明治十八年である。まだ憲法も民法もできていなかった。だいたいそういう感覚で考えると理解がいく。

マウル村のアブドの兄アリーは結婚して二年ほどたっても子供ができないので、最初の奥さんを離縁して二度目の奥さんをもらった。夫婦揃って産婦人科に行って検査をするというよう



農作業（風選）をする夫婦。カウカバンにて。

な手続きはない。子供ができなければ、女のせいなのである。アリーの場合は再婚した奥さんとの間に子供ができたから、少なくともアリーに問題はなかったのだろう。離婚しなくても二人目の奥さんをもらえばいいようなものだが、子供のできない女性が家にいても肩身が狭いからいつそ離婚したほうがいいのかもしれない。彼女も再婚して、今度は子供ができれば、そのほうがいいではないか、とはアブドの解釈であった。イエメンでは子供がない女性は、老後の生活も不安である。

離婚するためには婚資の未払い分の残り三分の二を払わなければならぬし、再婚するにも新たな婚資が必要である。アリーが手軽に離婚と再婚ができたのは、彼がアメリカに出稼ぎに行っていて、比較的金回りが良かったからだろう。

マウル村で最近問題になっていたのは、夫がサウジアラビアに出稼ぎに行つて帰つてこない場合、妻は自分から離

婚できるか、ということであつた。イエメンの多くの村がそうであるように、村の男の大半は、若いころにサウジアラビアに出稼ぎに行く。サウジアラビアで二―三年働けば相当の金が貯まるので、婚資を稼ぐにはうってつけだからである。普通は数年で帰ってくるのだが、なかにはサウジアラビアで小さな店を構えたりして長期に働きつづける者もいる。そういう場合でも通常は定期的に送金してくるし、何年かに一度は里帰りをする。しかしなかには音信不通になつてしまう者がいる。こうなると留守を預かる妻には災難である。当座は夫の父親や兄弟、自分の父親、叔父、兄弟が助けてくれるが、いつまでも中途半端な状況でいると、再婚するにも時期を逸してしまう。そこで、最近は十年間音信不通が続いた場合は、妻から離婚を申し立てられるようになったという。

離婚された女性と同様大変なのは、夫と死別した女性である。しかしこの場合は、死んだ夫の兄弟が、その未亡人を妻に加えることはよくある。子供にとっては父方の叔父（アンム）は、父親に次いで重要な人であり、結婚しなくてもこの子供たちの面倒は見なければならぬのである。こういう措置がとれるのは複数妻制度の利点といえよう。

ムハンマドの妻ジャミーラの母親はどういう理由かは知らないが離婚されてしまい、娘を頼つてムハンマドの家に同居していた。ムハンマドの父は妻と死別して以来独身だったが、結局ジャミーラの母親と再婚した。ややこしいが、ムハンマドとジャミーラの夫妻にとっては親ど

うしも夫婦ということになったのである。たぶん、死んだムハンマドの母とジャミールの母はかなり近い親戚であったのだろう。こうした組み合わせの再婚もそれほど奇異ではない。結婚も離婚も再婚も、生きていくための助け合いの精神のなかにある。